

前回のレポートで、既に目的地ドブロブニクに到着しているが、この物語は、その途中、8 日目の話である。

マカルスカという街を出て、淡々と走る。今日は向かい風がほとんど吹いていない。体調も良くどんどん走れる。

途中、すごい山を登る。564メートルの山頂をかすめるように道が走っている。こうなるとクレイジーとしか言い様がない。

アドリア海沿岸の道路は、山がちなくせに、トンネルが少ない。600キロの行程でたったの3回、しかもトンネルに入る前から向こう側が見えているような数十メートルのやつである。

加えて道路設計がなってない。ほとんどが荒野なのに、何で登ったり下ったりする道を作るんだろう。こう水平に道を通すべきじゃないのか。

海岸沿には大小の街があるが、これも問題。街はたいてい海沿いにある。道路がその街を通る時には海拔ゼロメートルまで降りなきゃいけない。幹線道路が街を避ける時には、その山側、つまり登ることになる。

だからいつも街が近づくと、下ったり登ったりすることになるのだった。その繰り返しである。

ボスニア・ヘルツェゴビナ

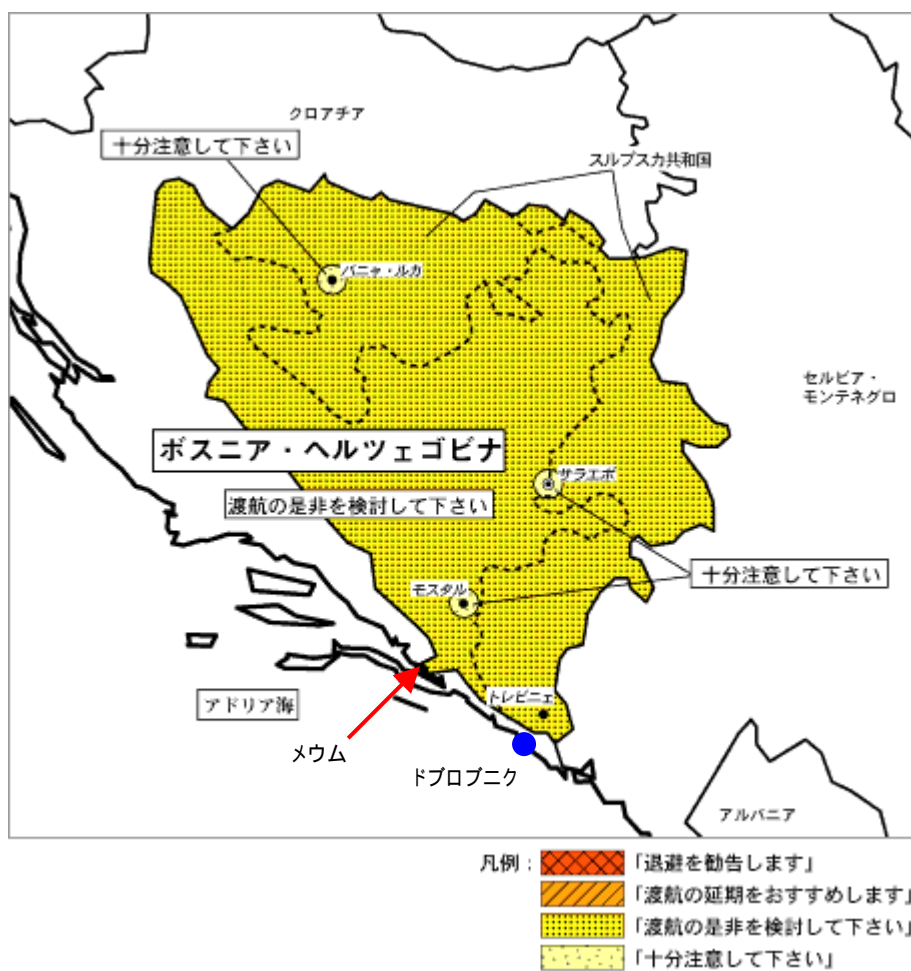
アドリア海沿岸を、リエカからドブロブニクまで走っている訳だが、途中、実はクロアチアの国が切れている部分がある。距離にして10キロ弱。

その国は、ボスニア・ヘルツェゴビナ。

地図で見ると一目瞭然だが、クロアチアは強国の為か、ほとんどの海岸線を押さえている。そして風光明媚な観光地のドブロブニクも手中に収めている。

従って、ドブロブニクに行くには、ほんのわずかな距離だが、ボスニア・ヘルツェゴビナを通る事になる。日本人は、ビザが

免除されおり、簡単に入国できるとはいえ、外務省から、『渡航の是非を検討してください』と出



ているので躊躇する。

検討の結果、やっぱり通る事にした。一応、10キロ弱を一気に突破した方がいいだろう、と前日のマカルスカの街ではそう思っていた。ボスニア・ヘルツェゴビナという名前にも少しビビる。

国境の2つ手前の街は海岸沿ではなく、宿そのものが一切なかった。国境の1つ手前の街は、とてもきれいな場所で、海岸には観光客であふれ、空いている宿がなかった。

そうすると答えは2つ。

- (1) 国境を越えて、さらに10キロ弱を走破してクロアチア側に入り宿を捜すか、
- (2) 10キロ弱の間にある、ボスニア・ヘルツェゴビナの街メウムで探すか

である。

取りあえず最初の国境を越える事にした。

イミグレは簡単だった。スタンプさえ押さない。



クロアチアとボスニア・ヘルツェゴビナ国境のイミグレ。高い山があって、そう簡単には密入国できない。

1.面積 : 5.1 万 km²

2.人口 : 438 万人

(91年調査。国外に多くの難民がおり、国内の人口はこれよりもかなり少ない)

3.首都 : サラエヴォ

4.言語 : ボスニア語、セルビア語、クロアチア語

5.宗教 : イスラム教、セルビア正教、カトリック

6.略史 : 6世紀 スラヴ人定住開始

14世紀 ハンガリーに抵抗しつつボスニア王国を確立

1463年 オスマン・トルコによるボスニア征服

1878年 オーストリア・ハンガリー帝国支配下の一州となる

1918年 セルビア人・クロアチア人・スロベニア人王国

1945年 ユーゴ構成共和国の一つとして発足

1992年3月 独立を問う住民投票の実施

1992年4月 本格的紛争に突入

1995年11月 デイトン和平合意成立



メウムという街

イミグレを過ぎると、数キロでメウムという街に着いた。

ここもリゾート地で、海岸の様子も申し分なさそうなのなのだが、クロアチア側ほど賑わっていない。先ほどの国境手前の街とほとんど変わらないのに、何故か海岸にはあまり人がいなかった。やはりボスニア・ヘルツェゴビナだからだろうか。

もう夕日が差しかかっていた。

そしてこの日は、大きな山越えがあって、しかも既に 80 キロ近く走っている。

もうどこでもいいから休みたかった。ここがボスニア・ヘルツェゴビナであっても、あまり危険な雰囲気がない以上、ここで泊まりたい。

1 泊だけ、と言うと何故かこの街では断られ続けた。クロアチアとは大違いだ。こっちは 2 泊分請求されてももう動けないから妥協するのに。

サービス精神がないと、資本主義ではやっていけないよ、ボスニア・ヘルツェゴビナ人たちよ。

でも一軒、レストランを併設しているところが、クナ払いOK、100 クナ(1850 円)で泊めてあげると言う。巨漢の老婆がしきっている。

この老婆、自分の店先に、ちょっとでも客でない車が停まろうとすると、ガンガンに怒りまくっていた。まるでギャオスである。一旦しゃべり出すと、3 分間はシャウトしている。ウルトラマンとも戦えそうだ。

まあ、確かに営業妨害になるし、こっちには関係ないので、この時はその異常な起こり方はあまり気にならなかったのだが.....。

ギャオス亭

まず部屋を見せると頼んだがちょっと待ってくれ、まあここで休んでくれ、と言う、

何か飲ませたいのだ。仕方ない、まあビールでも飲もうと注文。

念の為、12 クナ(222 円)である事を確認。もちろんクナ払い。

出てきたビールもクロアチアのもので、クロアチアの大体の店ではこの値段だったのでよしとしよう。

この老婆は英語が出来ない。義理の息子の様な男がいて、彼が英語で通訳してくれる。ネズミ男に似ている。

この男の案内で部屋を見る。これまで泊まってきたようなベッドのある部屋には案内されない。何故か居間である。そのソファで寝ると言う。でも冷蔵庫はあるし、何よりテレビがあってオリンピックが見れるようだ。今日は男子の体操団体があるはず。

古い建物の部屋で、しかもソファ。100 クナというのは今一つ納得行かないが、3 階でバルコニーがあって海が見えるし、何より風通しもいい。最近はどうも暑くて熟睡できない日が多いので、ここでよしとした。



ぼるいけど、海岸沿という立地は最高の宿。オーナーのギャオスは最低だったけど。

バルコニーには、何故か日本の様な布団が干してあった。

暑い様だったら、こっちで寝てもいいや。星空が見えて気持ちがいいかも、などと考えていると、このネズミ男、120 クナよこせと言う。100+12 は 112 だろ、と言うとビールは 20 クナとい

う。

『お前、せこい事しやがる。ギャオスに言いつけてやるからな』といい捨て、後でギャオスに支払う事にした。な~んかきな臭いぜ。さすがボスニア・ヘルツェゴビナ。

ところで部屋の鍵をくれと言うと、鍵はないという。ここでは誰も何も取らないから安心しろ、という。そういうお前が一番危ないぜ。

ただ、貴重品をもってレストランや買い物に行けば良いので鍵がなくてもOKだと判断し、結局この部屋に泊まる事に決めた。その時はそれで良いと思っていたのだが....。

水シャワーを浴びてからレストランと買い物に行った。さすがにお湯が出るかどうかまでは確認しなかった。どうもけちっているみたい。

この国では、ボスニア・ヘルツェゴビナマルクという通貨を使っているらしいのだが、ここではクナ払いでもOKという。書いてある数字に3.8倍すると、クナ表示になる。

ビールとワイン、オリーブ、ハムなどをかう。物価はクロアチアの都市とほとんど変わらない。

レストランでもクナ払いOKだった。イタリア飯でもなく、クロアチア飯でもない、ボスニア・ヘルツェゴビナの料理が食べたいというと、1つお勧めしてくれたものがあったのでそれを頼むことに。

しかしそれは今日、クロアチアのレストランで、ランチに食べたものと全く同じものだった。参ったぜ。



何故か[SAYONARA]というブランドの瓜楊枝。しっかりと登録商標のRマークがついていた。

ギャオス襲来

部屋に戻り、オリンピック男子体操を見ながら、日記などをつける。おおっ、日本調子良いぞ！で、疲れからうとうとしてしまった。

夜11時に、ギャオスが部屋にやって来て、いきなりテレビを消し、電灯を消した。

何だいきなり。鍵がないってのはやっかいだな。一体どうしたんだ人が借りている部屋に。と思うと、さっさとスカートを脱ぎ始めるギャオス.....。

見たくないが白いパンツが.....・

ボスニア・ヘルツェゴビナの女性に関しては、それまで私はイバナという名の女性しか知らない。いや正確に言うと、イバナという女性の行動パターンを耳にただけである。せっかくなので、ここでまずイバナについて

サラエボ/イバナハウス

日本人宿と呼ばれる宿が世界中にある。日本人宿とは、主に日本人がやって来て宿泊する宿である。旅には情報が欠かせないが、ガイドブックでは古くて役に立たない事が多いので、最新の情報を交換するにはうってつけなのである。

情報ノートなる生の情報を記入するノートも結構整備されている。もちろん情報ノートは日本人宿以外でもあるが、どうも外人は落書き帳みたいにしてしまってあまり役に立たない。日本人ってやっぱり素晴らしい。

日本人宿といっても、オーナーは現地人であるケースが多い。大体が日本びいきの人で親切である。だからさらに日本人が集まる事になって、余計外人は来なくなる。オーナーも、支払いが良くて礼儀正しい日本人の方が良いという人が多い。

そして、“名物”日本人宿と呼ばれる宿が世界中にある。

ボスニア・ヘルツェゴビナの首都、サラエボのイバナハウスもその1つである。

イバナとは、その宿のオーナーの中年女性で、日本人の“男性”が大好きなのだ。

彼女は、朝と昼の1~2時ころ、中央駅のバスターミナルの周辺で客引きをしている。

地球の歩き方を片手に『日本人こっち』と怪しい日本語で誘いを掛ける。

値段は、男性の場合に限り、友達だからといきなり半額になるケースがある。この時点でもう怪しい。そしてボディータッチがやたら多い。腕から始まり頭、顔、背中、足……。

この宿、男性二人で行っても気に入られると、何故か無理矢理な部屋割り、一人部屋になってしまう。そして部屋には鍵が無い。

一泊目の夜、旅行者が部屋でくつろいでいると、ミニスカート、網タイツに着替えたシャワー上がりの彼女の姿が何時の間にかそこに。

因みに一日目から勝負を掛けてくる。

マッサージを強要され、押してやると撫でろ、という注文に。

自称28歳ながら、実は50歳を越えているという噂だ。

泊まった人によると、いや50には見えない。割ときれいという人と、いや勘弁してくれ、という人がいる。

お相手をすると、宿泊費無料、3食付きになるらしい。さらに記念撮影があったりする。街をデートしてあげると、さらにお小遣い付きに。

半月前まで、彼女の術中にはまった日本人戦没者達は、顔写真を撮られ、壁に張ってあったという。お気に入りの青年Aは、一番写真が大きいそうだ。

何でも最近は、壁に張りきらなくなって、何でもアルバムに変更したらしい。

各地の情報ノートには、このイバナハウスでの出来事の記載、というか体験談？が載っていて、『男ながらにして女の気持ちを味わえる、こんな宿に泊まっては如何でしょうか』なんて言葉で結んである。

恐るべし、イバナハウス。

ギャオス寝る

ボスニア・ヘルツェゴビナの女性については、私はそのイバナしか知らない。

ここはイバナハウスと同じなのか！

いやちょっと待てよ、この国だったか、どこだったか、確かエスニック・クレンジング(民族浄化)が行われて、各地でレイプがあったとテレビで見たぞ。

まさかエスニック・クレンジングなのか！

でも待てよ、種を持っているのは私だから、エスニック・クレンジングになるのか？

ええい、どうでもいい。とにかくこんなおばさん、醜老婆ギャオスとなんて嫌だ……。

こちらがパニックに陥っていると、ギャオスは私の部屋のバルコニーに行き、ドアを閉めた。

何の事はない、ギャオスはいつもこのバルコニーで寝ていたのだった。そこに布団が干してあったのは、干してあったのではなくて、敷きっぱなしになっていたのだった。

ようやく事の次第が飲み込めると、安堵が怒りに変わる。

ボスニアヘルツェゴビナで、こんな古い建物で、水シャワーで、しかもベッドじゃない部屋に100クナ(1850円)も出しているのに、一体このプライベートの無さは何なんだ。

もう寝るからテレビはいいけど、暑いんだからバルコニーのドアくらい開けさせろ、とドアに手を掛けると開かない。

建物に相当ガタがきている。

で、力を入れると、バァーンと一気に開いた。

何とギャオス、バルコニー側から鍵を掛けていたのだった。何時の間に。

ギャオス暴れる

そして、バァーンという音以上に叫び出すギャオス。昼間のテンションと同じだ。

ギャアギャ騒いで、部屋を出て行けと言っている模様。

『金は払った以上、ここは俺の部屋、俺のバルコニー。泊まりたいなら金を払うのはそっちじゃないの』などと言ってみるが全く通じない。

真夜中のギャオスの絶叫に、すかさず駆けつけるネズミ男。まともな通訳になっていないが、どうやら出て行けと。

『何言ってるんだ、今になって』とネズミ男に反論している内に、ギャオスが、私のカバン、着替え、飲み物などを次々に玄関の外へ運び出しては投げ捨てている。

頭に来た。もう、こんな奴等とは一緒に寝れない、と覚悟して、荷物の整理を始め、玄関先まで行った。

で、『金を返してもらおう』と言うと、シャワーを使った、テレビを見たと言って開き直す。でも出て行けと。

『ふざけんな、賠償請求はしないけど、100クナ取り戻すまでは出ていくか！何なら警察を呼べ警察を』と言うと、

二人掛かりで手を引っ張り、足で押し出したり攻撃してくる。ギャオスの娘も出て来て、騒いでいる。

ネズミ男の蹴りがしつこかったので、

『お前、ブラックベルトにやられたいのか』とドスを利かすと、ネズミ男、一気にショボン。そして50クナを差し出して来た。

『払ったのは100クナだろうが』と言うが、再び昼間の剣幕で反論してくる。

剣幕はすごいが、へたに言葉が分からないので私には効果がない。

どうもこの家族、無茶苦茶金に執着があるようだ。

あまりの剣幕に、やがて近所の野次馬までやってくる。ギャオスの説明を聞いて、一様に軽蔑の目を差し向けられて四面楚歌の私。

でも、ここで折れては納得がいかない。

あくまで警察を呼んでもらおうとネズミ男に電話させると、面倒くさそうに5分後に警察が二人やってきた。

どうも、東洋人が暴れているみたいな通報をしたらしく、到着した警察官にさっと握手を求めた私を見て、彼らも妙な顔つき。

野次馬含め、大勢が一斉に警察官に事情を訴えている。

私も説明をするが、警察は英語が出来ない。

敵のネズミ男が通訳するという、とても不利な状況の中、身振り手振りで説明すると、警察はどうやら、この東洋人の言っている事が正しい、と判断したようで、100クナを返却する様にとの大岡越前のさばきで一件落着。

ギャオス、しぶしぶ100クナを差し出す。ざまあ見ろ。



ギャオスの姿。後ろはボスニア・ヘルツェゴビナのパトカー。左の男は警察官。

今夜の宿は？

さて、時は既に午前零時である。

今から宿なんて捜せない。警察を呼ばせたのは実は牢屋に一泊入れてもらおうと思ったからだった。ここはボスニアヘルツェゴビナ、『渡航の是非を検討してください』という国だ。

野宿したら何がある分かったもんじゃない。警察なら安全なはず。そう思ったのだった。

警察の車に自転車を乗せ、走る事1分。着いたのは警察署ではなく林だった。

どうも、ここで寝ろといっているようだ。警察は駄目だと。

はめられた。こんなところで野宿になるとは。

結局、薄明かりを頼りに寝袋を出し、野宿する事に。
背中が痛いほど、星空のきれいな夜だった。

しかしボスニアヘルツェゴビナ、だてに外務省が危険情報を出している訳じゃない。
ギャオスの様な危険があったとは。
結局、水シャワーを浴びれた、テレビが見れたとはいえ、余りに一方的だったので、そうとう頭にきて良く眠れなかった(だから翌朝は寝不足の上、6時半スタートになって辛かった)。

くっそう、ギャオスめ。
将来、NATOのパイロットになったら、真っ先に空爆してやるからな。

つづく